

俳句

くぼ 久保白船

周南市・平生町
(1884～1941)



【著作】
句集『ふきのたう』（昭和16）

自由律俳人久保白船（本名、周^{しゅう}）は、明治十七年（一八八四）四月九日、熊毛郡平生町佐合島（当時佐賀村佐合島）に生まれた。生後一ヶ月もたたないうちに母を亡くし、六歳で父を失った。

明治三十二年（一八九九）、山口中学校に入学し、勉学の傍ら山口中の同人誌『春の光』、校内誌『鴻城文学』の中心となり、更に『薄浪』を発行した。

明治三十七年（一九〇四）、二十歳のとき、中学校を卒業。養母をはじめとする親族の願いに逆らえず、東京の美術学校進学をあきらめ、佐合島に帰り、家業の醤油醸造業、村会議員そして青年団の世話などの多忙な毎日を送った。しかし、島の美しい自然や人情の中にあって、絵画や文学への思いは益々募っていった。

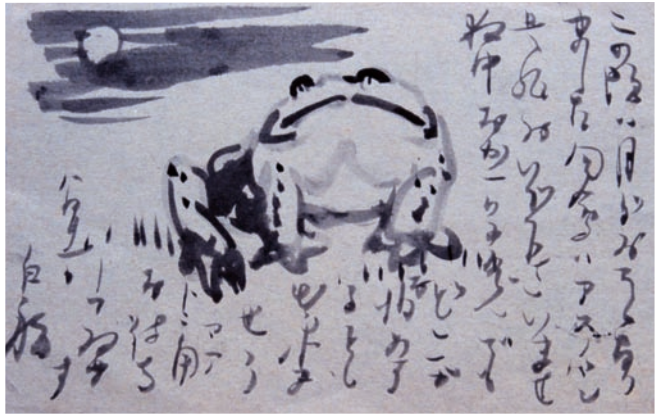
白船は、防府の種田山頭火^{なかつか}の山口中学校での後輩で、山頭火の誘いもあって、自由律俳句誌『層雲』の同人となった。若いころの作風は強靱で、写真のみでなく、イメージの鋭いものがあつたが、よき家庭人であつたことが作品にもあらわれ、句のリズムは繊細なものが多くなつていった。

『層雲』にあつて、山頭火と白船、そして隣村の江良碧松^{えら}はそろつて選者をつとめたことがあり、周防の三羽ガラスと呼ばれていた。特に白船は山口県の実代表者で、一時山陽南海西海地方の選者になつたこともあり、その名は轟いていた。

大正九年（一九二〇）、白船は徳山町佐渡町（現在の周南市）に移住、久保書店を営むが、山頭火をはじめ、多数の文人が入りすようになった。そしてここに徳山文芸協会の事務局が置かれ、また同人誌『雑草』を主宰して、たちまち地方文化の中心となつていった。

昭和十五年（一九四〇）十月、山頭火急死の報を受けて、松山に急行する。山頭火のお骨を抱いたとき、白船の句は最高潮に達した。
半年後の昭和十六年（一九四一）五月痔疾手術の経過が思わしくなく、満五十七歳で急逝した。
平生町佐合島の墓地に埋葬されている。

（文・瀬川芳昭）



大前誠二氏宛て書簡

「この頃八月がおそくなりました句会ハアスノバン是非おいで下さいませ夜中おかへりにならんでもどこか泊めすることも出来ませうマト二角お待ちしてゐます
八月十一日
白船」



直筆色紙「遠くのはなしこゑも月夜のいねの葉」

火屋の月 —— 山頭火を葬る ——

ここにも浦の家つづきのしらかべが

秋の日を、船でゆく

青波わたる、それがとんぼう

くるまはわたれないといふ橋、
の月が橋のうへ

燃えて燃えきつてけいとうの
こぼれてゐる土

月夜が水のやうで車の上、
せせらぎの音も

更けて月夜の人を迎ひに出てゐたといふ
ふたりみたり

雲へあゆむ月が逝かれたあとの月の秋

火屋へおくつてきて火屋の燈と月の
ある松の木

（以下略）

（『層雲』昭和16年新年号）

久保白船 年譜

（提供・瀬川芳昭）

明治17（一八八四）年

明治32（一八九九）年

明治33（一九〇〇）年

明治36（一九〇三）年

明治37（一九〇四）年

明治44（一九一〇）年

大正2（一九一三）年

大正3（一九一四）年

大正4（一九一五）年

大正5（一九一六）年

大正6（一九一七）年

大正9（一九二〇）年

大正14（一九二五）年

大正15（一九二六）年

昭和2（一九二七）年

昭和4（一九二九）年

昭和5（一九三〇）年

昭和7（一九三二）年

昭和8（一九三三）年

昭和11（一九三六）年

昭和14（一九三九）年

昭和15（一九四〇）年

昭和16（一九四一）年

《没後》

昭和17（一九四二）年

平成15（二〇〇三）年

平成16（二〇〇四）年

4月9日、山口県熊毛郡佐賀村佐合島（現・平生町）に生まれる。名は周一。父は佐十郎。醤油醸造業。母うたは5月5日に死亡。
山口中学校に入学。
九州一周無銭旅行を決行する。
山口中学校同人誌『春の光』を創刊。続けて校内誌『鴻城文学』後改題『薄浪』（梅原成美の『薄月』、久保周一の『白浪』に因んでつける）を発行する。
県立山口中学校卒業、佐合島に帰る。このころ白仙、白泉を号す。『文庫』に「島守日記」「表具日記」を発表。『みづゑ』同人となる。『日本水彩画会』展覧会出品。『春陽会』入選。
萩原井泉水の自由律俳誌『層雲』創刊、同人となる。
歌集『四十女の恋』に、山頭火、藤田文友などと出稿、回覧。山頭火が佐合島に来る（以後大正5年まで毎年度々来島する。）このころ破口栓、また破苦船を号す。
『層雲』山口県周東大会を田布施駅前平木屋旅館で開催、翌日萩原井泉水・種田山頭火・江良碧松・久保破苦船（白船）の四人は国木田独歩ゆかりの地を散策、戎ヶ下から水場に渡る。
白船を号す。

佐合島句会に江良碧松ら周防一夜会の会員らも参加する。
白船は熊本山頭火を訪問、防府の椋鳥復活句会へ同道する。
徳山町佐渡町へ移住。書店経営。
別府亀の井ホテルで、井泉水師歓迎俳句大会に参加する。
『層雲』本欄作家として活躍。
吉田常夏の『燭台』に、句と文を寄稿。（昭和7年まで）
徳山文芸協会事務局。『層雲』花葉欄選者として活躍する。
水彩画会に入選。俳誌『雑草』を創刊。
山頭火度々来宅。日本水彩画会に入選。山頭火主宰句誌『三八九』復活第四集発行に協力。
井泉水が徳山に来る。更に小郡の其中庵にて歓迎句会を開催。
白船個展。

春は山口、秋は長門峡へ『雑草』会員による吟行。『雑草』一〇一号で廃刊。9月27日山頭火は白船宅に鉄鉢をおく。
ナベツル見物吟行。10月11日山頭火松山にて急死。翌日白船は四国へ急行。遺体を茶毘に付す。
痔疾治療のため、入院中5月20日急逝。菩提寺は平生町佐合島の覚勝寺。遺句集『ふきのたう』刊行。
徳山に白船句碑「踞ればふきのたう」除幕式。
『ふるさとの自由律俳人久保白船』（平生町教育委員会）刊行。
平生町水場に白船句碑「青波わたる、それがとんぼう」除幕式。